

## 第二の神としてのロゴス

——殉教者ユステイノスとプロトレマイオスの議論を中心に——

津 田 謙 治

### 一 問題設定

真理の探究の末に、哲学者であり続けながらキリスト教信仰を抱くことになった殉教者ユステイノス（A D一六五頃没）<sup>(1)</sup>は、キリストの位置付けを明らかにするために「第二の神」〔θεός δεύτερος〕（*Dia.*, 56. 11）<sup>(2)</sup>または「第二の地位（にある神）」〔δεύτερα θέματα〕（*Dia.*, 13. 3）という表現を用いている。この響きは多神教的世界観を彷彿とさせ、誤解を招くきらいがあるが、古代における一神教的世界観の中で「第二の神」という表現を用いたのはユステイノスに限定されない。例えば、このような表象を用いた彼の先駆者として、アレクサンドリアのフィロンが挙げられる。フィロンがこの神をイエス・キリストとして捉えることではないとしても、「ロゴス」〔λογος〕<sup>(3)</sup>、「ヂュナミス（力）」〔δυναμις〕<sup>(4)</sup>、「御使い」〔ἀγγελος〕と表現する在り方はユステイノスと共通しており、このことは、これまでにも研究者によって指摘されてきた。また、この神がロゴスとして捉えられる限りにおいては、第四福音書の冒頭の記述との関連性も同様に示唆されてきたことも容易に想像できるであろう。<sup>(5)</sup>

しかしながら、ロゴスと諸力の間に序列的な区別を見出すフィロンの思考形式と比較すると、ユステイノスは同様の概念を用いつつも明らかに異なった形式を用いているように見える。彼は、ロゴスとデユナミス（力）を換言可能な表現として用いることがあり（*Dia*, 105.1）、また受肉したロゴスという在り方は、フィロンの思想の中に見出すことはないであろう。そして、ロゴス・キリスト論の萌芽が第四福音書の中に見出され、ユステイノスの思想に合致するように見えたとしても、両者の共通点はキリストがロゴスであり、この存在が世界の創造に関与したという事柄に留まり、それ以上のものを汲み取ることは困難である。<sup>①</sup>

このような背景から、ユステイノスの第二の神概念を、当時のプラトン思想、即ち中期プラトン主義の潮流の中に位置付ける研究が注目されて久しい。<sup>②</sup> 中期プラトン主義の中には多様な思想が含まれているが、ガイウス派のアルキノオスやアルピノスの思想においては、神の創造を介助する複数の神的存在が描かれており、これらはモナドからデュアドもしくは多元論への思考を解明する手掛かりを与えてくれるように見える。

他方で、フィロンのようなヘレニズム的ユダヤ教や、恐らく中期プラトン主義の思想に影響を受けて発展したグノーシスの思考形式が、ユステイノスの神学に与えた影響についてはこれまで（特にユステイノス研究の分野としては）十分に顧みられて来なかつたように思われる。<sup>③</sup> ユステイノスは失われた著作『シンタグマ』<sup>④</sup>においてキリスト教内部で多神論を説こうとする者たちに対して論駁しており、その片鱗は彼の二つの護教論やユダヤ人との対話集の中にも窺える。彼の遺した両著作において、ヘレニズム的ユダヤ教や中期プラトン主義への応答が語られているのと同様に、グノーシスのような多神論的な神的概念に対する批判的応答が何らかのかたちで包含されている可能性は指摘されうるであろう。また、これを明らかにすることは、二世紀において未だ発展段階にあつたキリスト論の位置付けと共に、

それと対峙した多元論的枠組みに対しても光を投げ掛けるものとなりうるであろう。

したがって本稿では、ユステイノスにおける「第二の神（ロゴス）」概念自体の分析よりもむしろ、「第一の神（万物の父）」と「第二の神」との関係から成る神的構造の分析を主軸にして、プロトレマイオスの多神論的枠組みと比較考察し、キリスト論が教理的に形成されていく思想的潮流を描き出すことを試みる。

## 二 ユステイノスとプロトレマイオスの思想的影響関係

ユステイノスは二世紀の半ばにローマで活躍し、彼の著作として二つの弁明の書（『第一弁明』『第二弁明』）とユダヤ人との対話集（『ユダヤ人トリュフォンとの対話』）が我々に遺されている。ユステイノスの出自が、少なくとも著作とその執筆時期や場所等に関して、比較的明確に伝えられているのに対して、プロトレマイオスに関する情報はあまり明らかにならない。ヒッポリュトスに拠れば、彼はウァレンティノスの弟子としてイタリアで活躍し、彼自身独自の教会を組織したと伝えられている<sup>11</sup>。エイレナイオスは、プロトレマイオスの周囲にいる人々の思想を伝えており、これが事實であれば、プロトレマイオスも二世紀の半ば頃に活躍したと考えられる。ヒッポリュトスとエイレナイオスの証言を組み合わせれば、プロトレマイオスはユステイノスと同じ時代、ほぼ同じ場所において活躍したことになるが、彼らは異端的思想家の系譜を描き出すことに力を注ぐ傾向があるため、漠然とした感否めない。教父たちは異端と見なすべき思想家を、古い異端の弟子として結び付け、誤った信仰の系譜に位置付けようとする場合があり、決定的な証言として用いることが困難となっている。反駁者に依拠しない資料として、プロトレマイオス自身の著作と見なさ

れているのは『フローラへの手紙』のみであるが、この手紙からは著者の出自は殆ど窺うことはできない。

他方で、ユステイノスとプトレマイオスの間には何らかの繋がりがあったことが古くから研究者たちによって指摘されてきた<sup>13)</sup>。それは、ユステイノスが『第二弁明』の中で、プトレマイオスという人物について触れているからである。彼は、プトレマイオスという名の教師に関して次のように語っている。

「あるときこの〔女性〕の〔前〕夫は……プトレマイオス〔Πτολεμαῖος〕という人物（彼をウルピクスが処罰したのであるが）に対して圧力を向けた。彼はキリスト教的な学びにおける彼女の教師であつた。（前夫は）（プトレマイオスを投獄した）百人隊長を、自分にとつての友人として利用して、プトレマイオスを捕らえて、彼がキリスト教徒か否かについてののみ尋問するように説き伏せた。そして、その心には欺瞞も虚偽もなく、真理を愛する〔ἐμπαθέη〕このプトレマイオスが、自分がキリスト教徒であることを承認すると、百人隊長は彼を監禁するよ  
うに命じ、長い期間投獄した。……〔プトレマイオスは〕キリストに従つた教えに依拠して〔ὁὐδὲ τὴν αἰὸν τοῦ Χριστοῦ διδομένη〕善の側に立ち、神的な有徳を教える場（τὸ διδασκαλεῖον τῆς θείας ἀγωγῆς）〔に自らが立つてゐること〕を承認した」（*Apo. II*, 2. 9-13）。

プトレマイオスは真理を愛するキリスト教的指導者として描かれており、その後自らの信仰によつて殉教したことがユステイノスによつて語られている。この箇所は、異端的人物を殉教死した模範的人物として描く奇妙な記述となっているにも拘らず、単なる人物名の偶然的一致として簡単に切り捨てられることはできなかった。この『第二弁明』の中で語られる、離婚に悩む女性の教師となつたプトレマイオスについての記述は、『フローラへの手紙』の中で描かれた状況に酷似していたからである。『フローラへの手紙』は、キリスト教信仰における律法の位置付けに関して疑問

をもった女性信者フローラに対し、師プロトレマイオスがそれを明らかにするという内容の書物となっている。律法を明らかにする過程で、プロトレマイオスは離婚の問題に触れており、ここでは『第二弁明』に類似した枠組みが見出される。

しかしながら、二つの著作に記述された二人の人物を同一視する決定的な事柄は、資料間だけでは判断できないであろう。詳細に分析するならば、両著作の人物を単純に同一視するのは困難であることが明らかとなる。まず、ユステイノスはウアレンティノスを異端的人物と見なしており、この流れに属するプロトレマイオスを好意的に理解していたかは疑問である。

「彼ら〔冒瀆者〕の内の誰とも我々〔キリスト教徒〕は交わりをもっていない。というのも、我々が知っているのは、彼らが無神論者で、不信仰、不義、不法を働く者たちであり、またイエスを崇拜することに反対して、その〔イエスの〕名のみを認めているということである。自分たちがキリスト教徒であると言いながら、彼らは……異教徒たちに従って〔異教の〕儀式に参加する。こうした者たちに〔含まれるのは〕マルキアン派〔Μαρκιανῶν〕、〔カルボクラテス派〕、ウアレンティノス派〔Ὀυαλεντινωτῶν〕、パシレイデス派、サトルニロス派と呼ばれる者たちで、彼らは自分たちの〔学派〕名を、各々の思想の創始者から名乗っているのである……」(Diz., 35. 5-6)。

ユステイノスは、罪や悪徳という言葉を用いているように、厳しい論調で異端者の瀆神を非難しており、ウアレンティノス派の人物を「真理を愛する」者と捉えることには無理がある。もちろん、ユステイノスがプロトレマイオスをウアレンティノス派と見なしていなかった可能性が無いとは言いが切れないが、定説を翻してこのことを証明するのは困難であろう。また、離婚が取り上げられる文脈も、『第二弁明』においては殉教の契機を説明する過程で離婚に触れ

られているのに対し、『フローラへの手紙』では律法の特性を明らかにするために離婚が例示されており、二つの著作では異なっている。二人のプトレマイオスを結び付ける可能性は依然として捨てきれないが、両者を同一人物と見なすだけの証明材料は十分とは言えないであろう。<sup>16)</sup>

しかしながら、ユステイノスがグノーシスのような多神論的思想に対して明らかに意義を唱えており、他方でプトレマイオスがユステイノスのような正統教会的思想（『フローラへの手紙』においては特に、万物の創造者が律法授与者であること）を明確な誤りと述べていること、また彼らが異なつた神観に依拠しつつも父なる神と第二の神を区別していることから、両者の思想的背景を考察することは意義のあることのように思われる。仮にユステイノスが実際には（『フローラへの手紙』の著者としての）プトレマイオスを知らなかつたとしても、プトレマイオスの抱いていた思考と類似の思想を意識して第二の神概念を著作中で措定しようとしたことは十分に考えられうるのであり、また反対にプトレマイオスがユステイノスを知らなかつたとしても、同様のことが当て嵌まるであろう。以下、ユステイノスの神概念を主軸とし、プトレマイオスの神的概念を比較しながら考察する。

### 三 超越者としての第一の神

ユステイノスは洗礼に関する護教論的説明において、「万有の父また支配者なる神、私共の救い主イエス・キリスト、聖霊」(Dia, 61. 3) を区別している。マタイ福音書（二八・一八一—二〇）の記述に従って父と子と聖霊を区別し、この「万有の父また支配者なる神」という呼び名が唱えられるのは、言葉ではこの神を言い表すことができないからで

あるとユステイノスは述べている。

「しかし、生まれなき方である万物の父に〔τῷ πάντων πατρὶ,……δυνάμει〕名を付けることは、〔我々には〕できない。というのも、何らかの名をもつて呼ばれる者には、名を名付ける者としてより年長の者がいるからである。〔万物の父を表す〕「父」「神」「創造者」「主」「支配者」〔πατήρ και θεός και κτίστης και κύριος και θεοτότης〕は名ではなく、〔万物の父の〕神の慈善と業から〔ἐκ τῶν ἐπιουσίῶν και τῶν ἔργων〕由来している〔ものなのであせ〕」(Apo. II, 6. 1-2)。

本来、この神を名付けることは人間には不可能であるが、何らかの呼び名が人間の側から求められる故に、正確には名ではない、この肩書きが用いられるとユステイノスは述べている。このことは、神が人間の思惟と知解を超えた超越的存在として位置付けられると同時に、万物の創造者としての特性を表している。<sup>17</sup>

ここでユステイノスは、万物を創造した父なる神と世界の直接的な関係を、極めて曖昧なものに限定しているように見える。もちろん、この神は創造、審き、救済を通じて世界や被造物と関わりをもっている。<sup>18</sup>しかし、この関係性は、次節で確認する「第二の神」を仲介している。また旧約聖書に記述された、この父なる神が世界に顕現した出来事も、「第二の神」に置き換えて彼は理解している。例えば、マムレの榎の木において顕現した神が父なる神であるというユダヤ人トリュフォンの解釈を彼は次のように斥けている。

「さて、祝福された敬虔な神の僕であるモーセは次のことを告知した。即ち、マムレの榎の木の側で顕れた方は(神であり)、この方と共にソドムの審きのために二人の天使たちが別の(神)によって〔ἐν τῷ ὄνομα〕遣わされた。〔この別の神は〕諸天を超えたところに永遠に留まっております〔ἐν τοῖς ὑπερουρανίοις δεῖ μένωντος〕、およそ誰に

よつても見られえず [oudein ophēvros]、触れられえず [dimitōnantos]、万物の造り手かつ父 [paterhēn tōn ōlōn kai paterhēn] であると我々は考えたと〔モーセは〕言っている〕(Dia, 56. 1)。

アブラハムの前に顕れたのは父なる神自身ではなく、この神は常に天上に留まっているために、地上に自ら顕現することはないとユステイノスは断言する。<sup>(9)</sup>この神は天において「不動」[ἀκίνητος] (Apo. I, 13. 4) の神であり、地上に移動することなく、不変不易の存在であることが彼の著作全体において一貫している。このことを、彼は場所の議論を用いて説明している。

「というのも、言い表すことのできない、万物の父と主は、〔創世記や出エジプト記の記述のように〕どこからもやつて来ることではなく、彷徨うこともなく、眠ることもなく、起き上がることもなく、そうではなくて、いかなる時も〔自らが同一で〕あり続けるような自らの場の中に [ἐν τῇ αὐτοῦ χάραξ ὅπου ποτ' ἐστὶ, μένει] [I ne] からである。そして、〔この方の〕眼差しは鋭く、聞く力も鋭い〔しかし、この方は〕眼や耳で〔見聞きする〕のではなく、語りえない力で〔見聞きする〕のである)。また、〔この方は〕万物を見渡し、万物を見分け、我々の内のいかなる者もこの方から隠れることはない。そして、〔この方は〕動くことなく、宇宙が生成する前に存在し、場所においても、また全世界においても包括されない方 [ὁ τὸν αἶρα τε ἐχώρητος καὶ τὸ κόσμὸν ὄναι] である」(Dia, 127. 2)。

超越的な第一の神は、生活の営みのような擬人的な神観を排し、被造物の中に顕現することはない。この神は天と自らを場所とし、そこから離れることなく万物を見渡している。この神の摂理は確かに働いているが、それは語りえない力によるとユステイノスは捉えている。この力の仲介と、中間者としての第二の神との関係は次節以降で考察す



る。ここではユスティノスが否定神学的な思考とともに、超越者として第一の神を位置付けようとしていることが窺われる。

他方でプロトレマイオスは、父なる神と万物の創造者とを区別し、両者を別々の神々として理解しようとしている。彼は父なる神が完全な存在であり、唯独り善なる方であると見なしている。そして、世界の創造はこの神によつて直接行われた業ではないが、この完全な神が万物の始原となっている。このことを、プロトレマイオスは次のように説明している。

「……[創造者が永遠の存在でないのは]なぜなら、生まれることなき父は唯独りであつて [εἷς τὸς ἐόντις ἀγέννητος ὁ πατήρ]、この方から万物は〔生じ〕〔一コリント八・六〕、万物は固有の在り方での方〔父〕に依拠しているからである。……生まれることのない父の本質のすべては、不純ではなく [ἀφάρτα]、自ら存在する光 [φῶς αὐτοῦν] であつて、純一 [ἀπλόον] であり、そして唯一なる存在 [μονοεἰδές] である。……我々によつて同意され、信じられているように、宇宙万物の純一で、生まれることなく、滅することのない、善なる唯一の始原から [ἀπὸ μίδος ἀρχῆς …… τῆς ἀγέννητου καὶ ἀφάρτου καὶ ὕδατος]、腐敗〔という本性〕や〔善と腐敗との〕中間的な本性が、いかに生じたか、また自らに等しく類似するものを生み、造り出す本性をもつものから、こうした〔腐敗や中間的なもののような〕非類似のものが、いかに生じたかを学ぶことを欲しようとして、今こゝで当惑することはない」(Epi., 33. 7. 6-8)。

この神は純粹な存在であり、光、純一、唯一の神として理解されている。コリント書の記述に従つて、プロトレマイオスはこの神だけが善であることを主張している。この善なる始原から万物が生まれているが、そこには創造者が仲

介されている。彼は如何にして善なる完全な神から創造者が生み出されたのかを明らかにしようとしているが、この議論は現在の我々には伝えられていない。

彼の「完全な神」概念は、律法との関係の中で明らかにされているものの、万物の存在の根拠として描き出されている。そのことを彼は「万物の父の本性と善性」[τῆν αὐτῶν πατρὸς τῶν ὄλων φύσει καὶ ἀγαθότητι] (Epi., 33. 5. 5) と表現しており、この善は倫理的なものよりもむしろ、プラトン主義的な善のイデアに近い様相を表している。直接的な創造は造物主によるものであるとしても、この完全な神は存在の根拠であり、超越的な始原と見なされている。

このようなプロレマイオスの解釈は、ユステイノスの第一の神にも類似した解釈が見出される。ユステイノスにおいても第一の神が存在の根拠として超越し、第二の神であるロゴスが創造の担い手であったと理解されるからである。しかし既に見たように、ユステイノスはこの第一の神に「創造者」という呼び名を用いることを否定せず、父なる神とロゴスが共に創造の業をなしたとする解釈を排除していない。これは父と子がそれぞれ固有の役割を担うとする経綸的三位一体との相違点にもなっているが、プロレマイオスの思想とも異なっている。プロレマイオスの場合、完全な神が創造に関わることは、この神から超越性が剝奪されることを意味しているように見える。仮にそれが『ローラへの手紙』で扱われた律法におけると同様に、被造物の不完全性に由来するとすれば、その思考は、むしろヌメニオスの第一の神と第二の神の關係に類比される。ヌメニオスによれば、第二の神は第一の神の模倣者であるが、創造は第二の神が直接的に担い、第一の神はその根拠として働くこととされている。この枠組み自体はユステイノスにも類似したのが見られるが、ヌメニオスにおいては被造物と質料の不完全性や悪が第二の神にのみ関連付けられている。即ち、第二の神(ヌメニオスにおいては第三の神)が悪をも含む質料を用い、不完全な世界を創造した。<sup>(2)</sup>このよ

うな神的概念の枠組みはプロトレマイオスに類比したものが見られるとしても、第一の神を創造者と見なすユステイノスの方には見出されない。

#### 四 世界に関わる第二の神

第一の神に関する記述と比較するならば、第二の神に関する議論は両思想家においても豊富なものとなっている。それは、ユステイノスにおいては、ユダヤ人に対してキリストの役割を説明することを主眼として『ユダヤ人トリュフォンとの対話』が著されたためであり、またプロトレマイオスにおいては、フロラに対して律法の授与者を明らかにすることが手紙の目的であったことに由来する。

ユステイノスは、第二の神について説明を始める前に、ユダヤ人トリュフォンが信仰を献げる神と自分の信ずる神とが同一であることを最初に強調する。それは、キリストの存在を説くことで、多神教的な誤解を招くのを避けるためである。

「私〔ユステイノス〕は彼〔トリュフォン〕に次のように〔答えた〕。『トリュフォン、それ故に、万物を造り、秩序づけた方〔*τῆν τοῦ ποιητῆρος καὶ διατάκτου τοῦ πάντων*〕とは別の神〔*ἄλλος θεός*〕は存在しないであらうし、永遠より〔そのような別の神は〕いない。また、我々の神とはあなた方の〔神〕に他ならず、その〔神〕はあなた方の父祖たちをエジプトの地から力強い手と腕によつて導き出した方と同一の方であると我々は信じている。そして、我々はあなたがたと異なる〔神に〕希望を抱くのではなく、あなた方〔が希望を抱いている

のと同じ神」に、即ち、アブラハム、イサク、そしてヤコブの神に「希望を抱いている」。しかしながら、我々が希望を抱くのは、モーセを通してでもなければ〔ὁ θεὸς Μωσέως〕、律法を通してでもない〔ὁ θεὸς θεῶν τοῦ νόμου〕のである』(Diz., II, 1)。

彼は、旧約聖書に記されたアブラハム、イサク、ヤコブの神と同一の神を信じていることを確認した上で、ユダヤ教とキリスト教の違いを聖書の解釈によって明らかにしようとする。ここでは、モーセと律法に従うことが救済に通じていない点を指摘した後、先ほど確認した「マムレの樫の木」における神の顕現を次のように解釈している。既に見たようにユステイノスに拠れば、父なる神自身は天に留まっておられ、アブラハムの前に直接顕れたのはこの神ではない。二人の御使いと共にアブラハムの前に姿を顕したのは、万物の創造者とは異なる神であるとされている。

「……聖書へと〔Eni τὰς γραφάς〕立ち戻り、あなた方が次のことを納得できるように試みたい。即ち、アブラハム、ヤコブ、モーセ〔の前〕に顕現したと言われ、また〔そのように聖書に〕書かれている方は、万物を創造した神とは〔別の〕第二の神なのである〔θεὸς δεύτερός ἐστι τοῦ τὰ πάντα ποιήσαντος θεοῦ〕。(しかし)私が〔このように〕語るのは、数においてであって、思惟において〔第二の神がいると言っているの〕ではない〔ἀριθμῶ <θεῶ> λέγω, ἀλλά οὐ ψεύμαι〕。なぜなら、この〔第二の神〕は、万物の造り手〔ὁ τὸν κόσμον ποιήσας〕、即ち、<sup>(2)</sup>の方を超える如何なる神も存在しないような方〔ὄντιον ὅν ἑαυτοῦ οὐκ ἐστι θεός〕が命じ、行い、関わることその他には何も行わないと私は言っているからである』(Diz., 56, 11)。

この「第二の神」は、二人の御使いの主であり、父である第一の神に仕える別の神として理解されている。このような解釈は、彼の二つの弁明書においても同様に見出される。

「この〔不滅の命〕のために、我々の教師となり、またこの〔不滅の命〕のために生み出されたイエス・キリスト、即ちティベリウス帝の治世下でユダヤにおける総督となったポンティウス・ピラトウスの時代に十字架に架けられた方、この方が神の子であり、〔神に次ぐ〕第二の地位に〔*ev deuteira xepa*〕あるという教えを受けた我々は、預言の霊を第三の序列〔*trivliá te prophetaion ev trita tages*〕に〔位置付け〕、ロゴスに従って崇敬し〔*meta logou tithémen*〕、〔そのことを〕告げ知らせている。というのも〔なぜ告げ知らせるのかと言えは〕、このことから我々が狂気に陥っていると見なし、不動で永遠に存在する神かつすべてのものの父に次ぐ第二の地位を〔*deuteiron xepan meta tôn ákraton kai dei óvra theon kai yevnētopa tôn ántwron*〕、十字架に架けられた人間に我々が付与していると〔人々が〕言っているからである。〔この人々は〕この〔事柄の〕内にある神秘〔*ev toútō mystērion*〕を知らないのだから、我々が説明する際にあなた方が彼ら〔の言葉〕に注意するように我々は願うものである」(Apo. I, 13. 3-4)。

ユスティノスはこの「第二の神」をイエス・キリストと同一視し、万物の父に次ぐ第二の位<sup>(23)</sup>にこの神を置いている。既に見たように、第一の神は不動のまま天から離れることなく、永遠に不変な存在と捉えられているために、我々の地上的世界に直接到来することは「第二の神」に帰せられている。この神は万物の父が産出した最初のロゴスであり、その意味で子と呼ばれている。

「さて、この方〔万物の父〕の子、即ち唯独りの子とまさに正しく呼ばれる方、この方を通じて万物が創造され秩序づけられた最初の時において〔*óre tñ doxhñ di' autou pávta éktrise kai ékóuntes*〕、被造物に先立って〔万物の父と〕共に在り、また生み出されたロゴス〔*ó logos*〕は、〔油を注がれたこと〕〔*kechρίθαι*〕と、神がこの

方を通じて万物を秩序づけたことに従って「キリスト」(Χριστός)と呼ばれている。この名自体もまた(万物の父と同様に)知られざる意味を内包し、「神」という呼称も名ではなく、人間本性にとつて知りえない事柄の想念 [δόξα] <sup>(25)</sup> なのである」(Apo. II, 6. 3)。

第一の神の「子」と呼ばれる第二の神は、創造に先立って神と共にあり、父に従って万物を整えた。このことは、子も父と共に創造の業に携わったことを意味しており、父だけが創造の役割を担ったのではない。しかしながら、創造者という呼び名は万物の父にのみ帰せられており、子は「ロゴス」「デュナミス」「御使い」「使徒」など、多くの名前と呼ばれるとしても、創造者として明白に語られることはない。

他方で、プトレマイオスにおける第二の神は、ユステイノスとは対照的に、世界の創造者であることが明確に述べられている。

「この〔律法を立てた〕者が、まさに創造者 [δημιουργός] であつて、この世界全体とそこに存在するものとの造り手 [ποιητής τοῦ κόσμου] なのである」(Ephi, 33. 7. 4)。

既に見たように、プトレマイオスは第一の神を万物の始原として理解していたが、万物の創造そのものはこの第二の神のものであつたと捉えている。この神が父によつて生み出された者であることはユステイノスと共通しているが、プトレマイオスはこの神が父に劣る存在であることを明白に主張している。

「他方で、〔この義の神は〕完全な神よりも下位にある存在 [καταθεώτερος τοῦ τελείου θεοῦ] であつて、かの〔完全な神の〕義よりも劣っているであろう。なぜなら、〔義の神は〕生み出された者であつて、生み出されない者ではないからである [γεννητός ἀν καὶ οὐκ ἀγέννητος]」(Ephi, 33. 7. 6)。

プロトレマイオスにとって、第二の神は義の神と呼ばれている。この義は善と悪の中間的な意味合いを含んでおり、この義のもつ中間的特性は、そのまま存在論的な中間性を意味している。即ち、この義の神は、善の神に存在として劣るが、悪魔ほど劣つたものではないと捉えられている。その主たる理由は、この神が生み出された者であるという点にある。これは永遠性の欠如<sup>(2)</sup>を含有するが、むしろ「生み出された」という可変性が、完全な神に相応しくないとプロトレマイオスが捉えた可能性も指摘されうる。ここには、後の時代に一部のアレクサンドリアの系譜に見られるような、第二の神の従属論的解釈が見出される。

## 五 神的概念の多重的構造

ここまで我々はプロトレマイオスの神的概念と比較しながら、ユステイノスにおける第一の神と第二の神の関係を分析してきた。二人の思想家の間には、第一の神を超越的存在者と捉え、第二の神を物質的世界との直接的関係性を担う者と理解する共通の捉え方があったように見える。大まかな枠組みにおいては共通点が見出される一方で、その神的概念の多重的構造には相違点も幾つか見出された。以下、それらの相違を三つの視点から取り上げて分析し、二世紀に活躍した二人のキリスト教的思想家の比較考察を試みる。

第一に、両者の間には創造者理解において相違があつた。ユステイノスは万物の父が創造者であり、第二の神がその介助者と見なされるのに対し、プロトレマイオスは完全な神を万物の始原と見なしつつも、第二の神を創造者と捉えている。ここではどちらの神を創造者と見なすかという点が異なっているが、枠組みそのものはそれほど大きく異なつ

ているようには見えない。両思想家において、第一の神は創造と存在の始原と根拠となり、直接的な創造者は第二の神であったと見なすこともできそうだからである。しかしながら、ユスティノスにおいてはロゴスの創造の働きについては詳細が語られておらず、また万物の神に「創造者」という名称を（それが正しい名ではないとしても）用いていることから、プロレマイオスに比して、第一の神の創造への関与が深いようにも見える。プロレマイオスにおいては、第二の神による直接的創造は明白なものとなっている。

第二に、両思想家における第一の神に帰せられた超越性を分析してみる必要があるであろう。ユスティノスにおいては、第一の神は不動、目に見えず、言い表せない方として否定神学的な文脈で表象される。彼の場合、第一の神の超越性は否定神学と深く結び付いている。これはプラトン主義的な思考によるものと捉えられるが、同じプラトン主義的な影響を受けたと言われるプロレマイオスの方では、第一の神に対して否定神学的な言説はあまり用いられていない。第一の神は確かに「不純ではない」が、「完全な神」や「自存する光」として言い表されている。プロレマイオスの場合、第一の神が超越者として描かれているのは第二の神の不完全性と関連している。即ち、プロレマイオスは律法の不完全性からこの第二の神の不完全性を導き出しており、このことから第一の神のみに超越的な側面が付与されているのである。

そして第三に、上記に関連した従属論的思考において、第二の神の捉え方には両者に決定的な相違があったように見える。第一の神と第二の神の間に従位的区別を明確に見出しているのはプロレマイオスである。彼は、生み出した者と生み出された者の間には、明白な優劣があると捉え、第一の神だけが完全な存在であると主張する。善、そして義においてさえも、完全な神は第二の神を凌駕しており、第二の神は完全な存在と質料的な存在との中間者と見なさ



れている。

他方でユステイノスにおける従属論的思考は、やや複雑である。プロトレマイオスと異なり、彼はキリストである第二の神を劣った存在とは見なしていない。しかしながら、御使いや使徒 (Apo. I, 63. 5) としてのキリストの位置づけを除外したとしても、第一の神が超越的世界に留まり、第二の神が我々の住まう地上の世界に顕現するという思考は、存在論的な従位的区別が基底にあるような印象を受ける。ここには、父と子の永遠の区別、また等しい位格としてのロゴスの解釈が未だ明確な問題とはなっておらず、そのような教理の形成に至る過渡的な思考が見出されるであろう。

### 註

(1) ユステイノスのテキストはいずれもマルコウィッチのものを用いた。Iustinus Martyr, *Apologeticae pro Christianis*, M. Marcovich (ed.), PTS, Bd. 38, Berlin/ N.Y., 1994; *ibid.*, *Dialogus cum Tryphone*, Miroslav Marcovich (ed.), PTS, Bd. 47, Berlin/ N.Y., 1997. それぞれは翻訳と抄訳がある (ユステイノス、柴田有訳「第一弁明」「第二弁明」『ユステイノス 第一弁明、第二弁明、ユダヤ人トリュフォンとの対話 (序論)』同「ユダヤ人トリュフォンとの対話」(序論)、三小田敏雄訳、キリスト教教父著作集1、教文館、一九九二年、ユステイノス、久松英二訳「ユダヤ人トリュフォンとの対話」、上智大学中世思想研究所編「中世思想原

典集成1 初期ギリシア教父」平凡社、一九九五年、四七—九八頁。なお、三小田訳は第一章から第九章まで、久松訳は第四八章から七六章までを扱っている。近代語訳としてハイザーの独訳 (Der Heilige Philosoph und Martyrer Iustinus, *Dialog mit dem Juden Tryphon*, Philipp Hauser (ed.), Bibliothek der Kirchenväter 33, München, 1917) を用いた。本稿では「第一弁明」を Apo. I, 「第二弁明」を Apo. II, 「ユダヤ人トリュフォンとの対話」を *Dia* とそれぞれ略す。なお、これらの文書が著された年代については、マルコウィッチの説に従った (Marcovich [1997], p. 1)。

(2) ここで「第二の神」という訳語を当て嵌めたのは、グッ

27-28頁) (E. R. Goodenough, *The Theology of Justin Martyr: An Investigation into the Conceptions of Early Christian Literature and its Hellenistic and Judaistic Influences*, Amsterdam, [1923], 1968, p. 147) 'ハリー (J. N. D. Kelly, *Early Christian Doctrines*, 5th Ed., 1977, London, p. 101) 'スカーサウ (O. Skarsaune, *The Proof from Prophecy: A Study in Justin Martyr's Proof-Text Tradition: Text-Type, Provenance, Theological Profile*, Leiden, 1987, p. 409ff.) によられた。

(3) フィロン『ヘンリオン』121' 『栽培』86' 『ケルビム』27-28など。フィロンにおけるロコスとキネナシスに関する議論については、拙論『アレクサンドリアのフィロンにおける『二つの力』の問題——ヘレニズム思想との関連性を中心として』『京都ユダヤ思想』第二号、二〇一二年、六一—五頁)を参照。

(4) このような立場として、特にグッツァイナフ (Goodenough, [1923], (1968), pp. 168-173) が挙げられる。バーナードはこのグッツァイナフの立場を否定し、ユステイノスもフィロンも旧約聖書のラビ的解釈の伝統に依拠したために両者が類似してユスと語らばユス (L. W. Barnard, *Justin Martyr: His Life and Thought*, Cambridge, 1967, pp. 93-96)。スカーンも、フィロンの影響を認めつつも、同一の聖句の箇所を異なった在り方で解釈していることが

ら、ユステイノスの思想(特に「第二の神」に関し)の中に必ずしもフィロンだけの影響を見出す必要はないとユス (Skarsaune, (1987), pp. 409-424)。

(5) エンネー・オーフ。 Cf. U. Kühnweg, *Das neue Gesetz: Christus als Gesetzgeber und Gesetz. Studien zu den Anfängen Christlicher Naturrechtslehre im 2. Jahrhundert*, Marburg, 1993, p. 105. なお、キネネヤンティンと魏れが、この主題はU・シヤーンの研究 (1888) に題名を知られる。

(6) フィロンは神が、'ロコス'、そして諸力(特に創造する力と支配する力)という序列を通じて世界に働きかけると捉えている。これについては前述の拙論を参照。またフィロンの場合、このロコスはヒュポスタシスとして語られていても、メシアのような人格として語られていることはなら (F. Siegert, *Der Logos, „älterer Sohn“ des Schöpfers und „zweiter Gott“*; *Philons Logos und der Johansesprolog, in: Kontexte des Johansesengelioms: Das vierte Evangelium in religions- und traditionsgeschichtlicher Perspektive*, J. Frey (eds.), Tübingen, 2004, p. 283)。

(7) Kühnweg, (1993), p. 105. 両者の共通点とさう意味づけは、水垣氏も同様の指摘をしてくる。ただし、水垣氏は、ユステイノスとエンネ福音書の比較から、「三一神的でないロコスの位置付けなど、ユステイノスの特徴を描き出して

いる。水垣渉『宗教的探求の問題』創文社、一九八四年、一三七—一四六頁。

- (8) 例えはアンティノイの立場が挙げられる (C. Andresen, "Justin und der mittlere Platonismus" in: *ZNW*, Bd. 44, Berlin, 1952/53, pp. 157-195; *ibid.*, *Logos und Nomos: Die Polemik des Kelsos wider Christentum*, Berlin, 1955, pp. 312-344)。アンティノイは「世界の材料となった質料が永遠であったこと」またこの質料をロイスによって秩序づけることが創造の業と捉えることなどが中期プラトン主義的立場との共通点であると指摘している。ただし、彼の主張はエステイノスの思想と中期プラトン主義を結び付けるには十分な「ストア主義的な前提の広範な哲学の中で位置付けられるべき」。

- (9) エステイノス研究の立場からいえばならが、キョーネヴェークの研究はエステイノスとプロトレマイオスとの関係を詳しく論じている (Kühneweg, [1993], pp. 88-170)。ただし、マルクシースが指摘する「エスタ」エステイノスがプロトレマイオスに影響を受けたとするのは「時代に逆行する可能性もあり」行き過ぎの極点に見える (C. Marksches, "New Research on Ptolemaeus Gnosticus", in: *ZAC*, Bd. 4, Berlin, 2000, p. 245)。
- (10) 『正統した教義テキストの体系 (反教書)』[ὁρθόδοξα κτὰ πρᾶσιν τῶν ἑτεροδόξων] (*Apo. I*, 26, 8)。

第二の神としてのロコス——殉教者エステイノスとプロトレマイオスの議論を中心として——(津田)

一〇三

- (11) ヒッポリュトス『全異端反駁』6, 29, 1.
- (12) エイノナイオス『異端反駁』1, pre. 2.
- (13) 例えはバルナバ (A. v. Harnack, *Marcion: Das Evangelium vom fremden Gott*, Leipzig, [1924], 1996, pp. 29-30) である。
- (14) 独訳を作成したホイザーによれば「これはバルキオン派を指してであると考えられてくる」。
- (15) ドマンターベルクは「エステイノスは『第二弁明』を書き上げた当初 (一五二年頃) プロトレマイオスを異端視しておらず、『エタヤ人トリュフォンとの対話』を執筆した時期 (一六〇年頃) から彼を異端と見なしたと推測している (I. Dunderberg, "The School of Valentinus", in: *A Companion to Second-Century Christian Heretics*, A. Marjanen [ed.], Leiden, 2005, pp. 76-77)。
- (16) ここまでの議論に関しては拙著『バルキオン思想の多元論的構造——プロトレマイオスを中心とするエステイノスの思想との比較に基いて』(表出版社、二〇一三年、三七一—三八頁)を参照。
- (17) ここには、聖書の記述から導き出された万物の創造者という概念と共に「エステイノスのアンティノイ主義的な思考を具現化するアンティノイの指摘」(Barnard, [1967], pp. 77-78)。
- (18) Cf. E. F. Osborn, *Justin Martyr*, *BZHT*, 47, Tübingen

- 1973, p. 19.
- (19) このような解釈は、ユスティノスの対話者であるトリュフォンの立場（マムレの樫の木に頭れたのは三人の天使）に対する応答であると共に、フィロンとの相違点（寓意的解釈によれば、神自身と二つの諸力）ともなっている。スカロンに拠れば、三人の天使のうち、真ん中に立つのが万物の父である神自身であるとするフィロンの解釈に対して、ユスティノスはむしろ別の解釈（キリストと二人の天使）を打ち出さなくてはならぬとされる (Skarsaune, [1987], pp. 410-412)。
- (20) 本稿では、タイスネルの校訂版を資料として用い、彼の仏訳に加えて、適宜ハイマンの英訳とヘルマンの独訳を参照する。Ptolemée, *Lettre à Flora*, Gilles Quispel (ed.), SC. 29, Paris, 1966; *The Gnostic Scriptures*, Bentley Layton (ed.), N.Y., [1987], 1995; Werner Hörmann, *Gnosis: Das Buch der verborgenen Evangelien*, Augsburg, 1995, pp. 192-201. なお、本稿ではこの『フロラへの手紙』を *Epist.* と略す。
- (21) ヌメニオス『断片集 II』なお、ユスティノスの神的枠組みをヌメニオスと比較して捉えようとする研究者もある。A. J. Droge, "Justin Martyr and the Restoration of Philosophy", in: *CH*, vol. 56, no. 3, 1987, p. 310; P. Widdicombe, "Justin Martyr's Apophaticism", in: *StP*,
- 36, Leuven, 2001, p. 316.
- (22) この「数において別である」というユスティノスの表現を、柴田氏は生む者と生まれる者との区別にもとづいて数えることができる、ということを指していると解釈する(柴田有『教父ユスティノス——キリスト教哲学の源流』勁草書房、二〇〇六年、二〇五頁)。
- (23) 「第二の位」という表現を、ユスティノスはプラトンの教説と関連付けるかたちで別の箇所でも用いている (4p. 1, 60, 3-7)。
- (24) 「マウサ」は「期待的事柄」のような意味合いを含んでいるが、ここでは柴田訳に従って「想念」とした。
- (25) Osborn, (1973), pp. 35-36.
- (26) 明確には述べられていないが、「第二の神が存在しない時があった」とする解釈の余地がここにはあるであろう。
- (27) Barnard, (1967), pp. 77-84.
- (28) 恐らく、第二の神が創造した世界の不完全性も含まれるであろう。神が与え、造り出したものの不完全性から、その神の不完全性を導き出す在り方は、マルキオンなどにも見出される。